

人物

みのかも

9

座馬金太郎

「医は仁術」を貫いた人

明治から昭和にかけて医院を開業し、元日を除いて一日も休まず庶民の診療に当った医師・座馬金太郎は明治二年（一八六九）六月、上古井村に生まれた。

座馬家は、庄屋など村役人を勤めるかたわら、医薬の販売にたずさわっていた旧家である。金太郎は、わずか十七歳にして薬剤師の免許を得、各務郡桐野村の医師・大野春道の門下となり、医学の修業をはじめた。その後、彼は上京して済生学舎（現在の慈恵医科大学）を卒業し、一時東京の丸茂病院に勤めてのち、再び桐野の大野病院に勤務した。十年後、勤務を同じくしていた涼夫人と結婚する。涼夫人は太田町中町の林五郎の長女であった。五郎は太田町長を五期つとめた他、郡会議員、町会議員なども歴任した名望家であった。やがて五郎の死去にもない屋敷を譲り受けて移り住み、医院を開業する。

彼は患者から「座馬先生」とは呼ばれないで「座馬さ」という愛称で呼ばれ親しまれた。その愛称は、「お医者さん」の代名詞ともな

濁流の中を小舟で決死の覚悟で往診したという。

金太郎は、大正時代自転車を購入、往診に使っていたが、自転車にのって往診に行くと脈がおどるから人力車にした方がいいという理由で人力車で往診するようになった。下町の市川磯吉が車夫として送迎した。

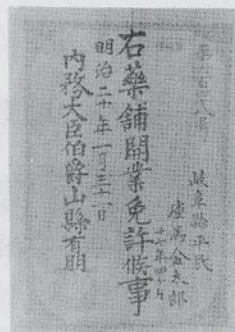
彼の生涯は患者に対する愛情と親切に終始したといってもよく、エピソードに事欠かない。毎日八



略歴▶明治2年（1869）上古井村に生まれる。済生学舎（現・慈恵医科大学）を卒業、修業ののち、明治36年、太田町に医院を開業する。太田町医なども兼務する。昭和9年没、享年66才。

十人、百人と訪れる患者のなかには、診療をうけるとそれだけで安心して、薬を渡しても忘れていく人が日に二、

鉄道医を兼務し、強い責任感をもつて献身的に患者に接した。座馬医院の休診日は元日だけでそれ以外の日は一日も休まず診療を行った。夜間の往診の依頼は多い時には一晩に三回もあったが、嫌な顔一つせず出かけた。土田方面からの往診の依頼も多く、木曾川が増水し川止めとなった時も、



17才で得た薬剤師の免許

いわなかったという。かつて座馬医師に世話になった老人は次のように語っている。

「幼時、私の家は貧しくて家族が座馬先生にかかっても薬代ひとつ払えなかった。私が小学校を卒業し、働くようになってから何とかしてお払いしようと尋ねにいくと、『そんなにあわてて払わなくてもいい』といってくれましたが、私は一生懸命働いて金を貯めた。やっと金ができて払いに行ったら先生は『無理したのと違うか。いつでもよかったのにすまんのだ』といってくれました。先生からいただいたこの温かいことばは今でも忘れることができない」

医道ひとすじの座馬医師であったが、昭和九年一月、加茂郡医師会に出席した帰途、中川辺駅頭で倒れ、帰らぬ人となった。享年六十六歳であった。